

# 高齢者と子つなぐ場

## ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

第4部 支援の現場から  
<15>

◎

### 子ども食堂④

「野菜、上手に切れたか」「えらいね」。慣れない手つきで野菜を刻む子どもに、高齢の女性が褒め言葉を掛ける。物置で賑わいが溢る高齢者もいるが、子どもがわいわいと楽しんでいる。作るお茶を笑顔で見守る。

沖縄市大里の住平街に昨年12月、子どもと地域の高齢者、ボランティアスタッフが一緒に昼食を作って食べる子どもキッチン「お空間たんぽぽ」が開所した。毎週土曜10時にオープン。体験料も100円、大人300円で誰でも参加できる。

毎回、大人と子ども合わせて10~15人が参加する。食事の準備でなく、自分たちで調理し、

他者と食卓を囲む体験を重視している。古縁理枝を代表は「個々の家庭環境や人との関わり合いで子どもたちの人生が左右される。希望する道徳を導き、歩んでいけるよう後押ししたい」と開設の経緯を話す。「将来を考え、ご飯を食べさせるだけでなく、自分で作る力を身に付けることが重要だ」と強調する。

子どもと高齢者の「サイバー」ス施設だった場所を、誰でも利用できる地域の交流スペースとして改築。施設を借りている介護事業会社「いきがいきクリエーション」が古縁理枝と共同運営している。

同社代表で作業療法士の田村浩介さんからは「高齢者と子どもが自然に関わり合える場所を

提供し、



子どもと高齢者の作り出す笑顔も笑顔の子供さん(田中真由美) 沖縄市大里

## 共に調理 食卓囲み絆生む

つくりだしたと説明。(介護保険等に頼らずに生きられる社会が求められる中、多様な世代が集う場所は高齢者にとって「生きがい、生きがい、介護予防の場になる。子どもにとっても人と触れ合い、つながる場所になつてほしい」と期待する。自然参加入率が下がり、地域

の見守りが課題になっている現状で、目指すのはさまざまな世代の地域住民が気軽に出入りし、互いに支え合う社会づくり。「それぞれが得意なものを持ち寄り、生きがい、生きがい、支えあふ場になる」と強調する。

地域で支え合う現代版「ユイマー」の仕組みをつくっていききたい」と抱負を語る。

屋敷、子どもたちは施設の外に出て、水遊びを楽しんだ。炎天下で元気なホースの水を掛

け合い、すぶめられてはしゃぐ。井戸水なので使い過ぎを心配されることなく、心ゆくまで遊べる。高齢者と一緒に体験を楽しむこともある。

■ 古縁理枝

■ 田中真由美